KARIBIB の回想

2023 年度１次隊/数学教育/渡辺 崇人　　2024 年９月 19 日　Vol.17（番外編）

Vol.16 に引き続き、今回も番外編としてナミビア以外のアフリカの国を紹介します。本日紹介するのは、南部アフリカでナミビアより東に位置し、“The Warm Heart of Africa（アフリカの温かい心）”という愛称がある「マラウイ共和国」です。何でも人々の性格が温かいことからこの愛称で親しまれているそうです。実際に訪れてみての所感ですが、ナミビアでは路上で売り子がしつこく迫って来る時がある一方、この国では少し遠慮があるような様子が見られ、どこか日本人に似た部分を感じました。またナミビア人は恰幅がよく、背丈が大きい人が多い印象ですが、こちらの方はナミビアと比べるとそうではなく、身長も日本人と近い人が多いからか、威圧感をそこまで感じずに話すことができ“温かい心”という愛称通りの印象を旅行期間では感じることができました。

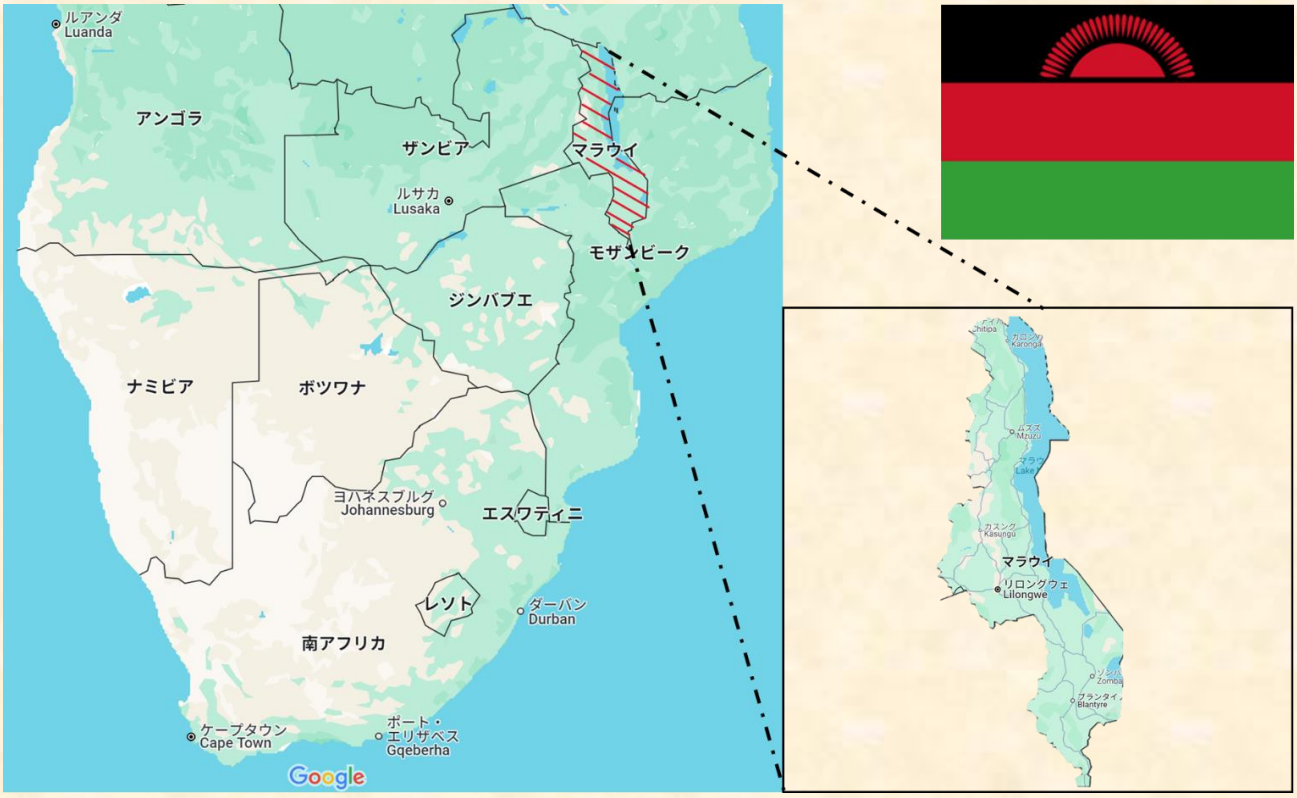

図１：マラウイの地形図（国旗は https://en.wikipedia.org/wiki/Flag_of_Malawi）

そんなマラウイの地形の最大の特徴は、何といっても国の東側に位置し、アフリカで３番目、世界で９番目の広さを誇るマラウイ湖です（図１）。この湖は国土の 20%を占めているそうで、滋賀県に占める琵琶湖の面積の割合（県全体の 17%程）よりも大きいです。

●基礎データ（外務省「マラウイ基礎データ」より）

面積	11.8 万 km^2（日本の約 1/3）
人口	2,041 万人（2022 年）
首都	リロングウェ
言語	チェワ語、英語（以上が公用語）、各民族語

写真１：空港からほんの少し離れた場所の車窓からの風景

最初にこの国に降り立った時の印象は「ナミビアと全く異なる」というものでした。例えばナミビアは、首都の空港から各都市まで舗装された道路が続き、国土の大半が乾燥地帯で木々が少ないため岩肌が露出しており、岩の白に近い茶色が一面に広がっています。一方でマラウイは、空港からほんの少し離れた場所から既に舗装されていない道路が続き（首都にも一部あります）、赤土の道と木々の緑がたくさん目に入ります。これこそ“アフリカ”と聞いて真っ先に日本人が想像する景色かもしれませんが、ナミビアに長らくいると返って新鮮でした。また、車の前方から牛の大群が道路をふさぐようにして押し寄せ、しばらく車を停止させる必要がある場面にも遭遇しました（写真１，２）。さらに写真はありませんが、移動手段の一つであるミニバスは助手席に３人を座らせて、定員の約２倍の乗客を押し込んで出発します。

写真２：牛の大群が前方から押し寄せる様子

写真３：露店の様子

買い物も、ナミビアでは隊員は皆それぞれの居住都市でスーパーが利用できるのに対し、この国では地方都市にはスーパーがなく、隊員は露店で必要な物資を買っているとのことでした（写真３）。

これらの環境からも読み取れる通り、この国はアフリカ最貧国の一つとして数えられ、人口の 70.1%が一日$2.15（≒305 円）以下で生活をしているそうです。人口の約 80%が農業に従事しているとされ、収穫量が天候に大きく左右されることから貧困削減が思うように進んでいないという現実があります。

（出典：朝日新聞 DIGITAL with Planet）

今回、この国に渡航した目的の一つは同期の隊員に会うことです。マラウイ派遣の隊員はもちろん、同じく南部アフリカのザンビア共和国、ボツワナ共和国からも同期隊員が集まり、久しぶりの顔合わせや互いの近況を聞けることが楽しみの一つでした。

写真４（左）：同期との集合写真（ケープマクレア）　写真５（中央）：漁師が漁に出る様子
写真６（右）：湖で洗濯や魚を干しているところ

首都からマラウイ湖の近くにあるケープマクレアという町に移動し、皆と数日過ごしました（写真４）。この町は 1984 年に世界自然遺産に指定され、住人は主に漁業、農業、ロッジやツアーガイド等の観光業に従事しています。そのため、世界遺産とはいえ、日が沈むまでは漁師が漁に出ていく様子や湖で洗濯したり、魚を干したり、絵を売ったりと人々が生活している様子を窺うことができます（写真５，６）。このマラウイ湖は水深 706m とアフリカで２番目に深い湖で、それ故か固有の生態系も存在しますが、一方、手足を浸すことにより幼虫が皮膚から侵入して感染する住血吸虫も存在するため JICA ボランティアはこの湖での遊泳が禁止されています。一見すると透き通った水の綺麗な湖だったため、知識がなければ 100%潜っていました。旅行の下調べは本当に重要だと改めて思いました。

また、この町では農業支援・雇用対策として地元のサッカークラブや観光ガイド組合などが協力して共同農園を経営しており、そこで収穫できた野菜やマラウイ湖で獲れた魚は近くのレストランで実食することができます。そのため、我々もそこで食事させていただきました。メニューは豊富で、魚は油がのっており予想より一回り大きかったです。食事をしながらですが、この状態にもって来るまでに様々な苦労があったのだろうと JICA ボランティアならではの視点で物思いに耽っていました。また食材だけでなく、レストランスタッフも地元の住人で、将来的には外部のサポートが一切ない状態で自走できることを目標にしているそうです。アフリカ最貧国の一つを訪問し、同期と会えた喜びとともに、その国ならではの苦労話や持続可能な国家を目指したサポート体制を目の当たりにし、他国で活躍している人たちを間近に観察できたことはいい刺激になりました。

ちょこっと余談

マラウイにはクリスマスシーズンに訪れました。そのため、写真左のようにツリーが飾ってあったものの夏空に海という慣れない環境でした。また、隊員どうしが合流して間もない頃、現地の人とマラウイ隊員が話している中にザンビア隊員が「Mwachoma Bwanji?」と当たり前のように入っていった時はなぜ現地語を話せるのか疑問でしたが、実はマラウイのチェワ語とザンビアのニャンジャ語は共通部分が多く見られるそうです。ちなみに“ありがとう”は「Zikomo(ゼコモ)」。これだけは旅行中に多用し、今でも覚えています。

次回：アフリカのヨーロッパ!?サッカーW 杯の開催地でラグビーでも有名な国を紹介します！